

市史の小径

第31回

「ええじゃないか」
始まる

え

「ええじゃないか」は、明治維新を目前に控えた慶応3(1867)4年に東海から近畿、山陽筋を中心に各地で起こった大衆群舞です。「ええじゃないか、ええじゃないか」と囃しながら群れ踊る様子は映画にも取り上げられ、混乱する幕末の世相を示すものとされますが、甲賀市域でも宿場や街道沿いの村々で発生しています。

土山宿にほど近い東海道に面した市場村では、慶応3年の11月に伊勢神宮のお札が降ったのを最初に、鹿島社・金比羅社・愛宕社・地元の田村社などのお札が次々と降っています。お札が降った家ではこれをまつり、人々に施しをし、近隣の人々は「見舞い」と称して祝い、供え物をするとともに、ここでは「よいじゃないか、よいじゃないか」と囃しながら群れ踊る姿が見られました。各地のお札降りの情報も伝えられ、八幡では神輿2基が天から降るといふ驚くような話も書とめられています。踊り手は衣装を絹物で新調し、男

は女の、女は男の姿となり、手ぬぐいには「おかげ」と染め抜き、性的に奔放な歌詞で囃しました。その行列は往来に飛び出し、「旅人または乞食は申すに及ばず、御武家様方、御用御通行の御方様」(原文)まで無理に酒をのませ祝わせたといえま

す。この様子を日記に認めた同村の庄屋は、山城淀藩領の数か村を束ねたいへん有能な人物でしたが、天からお札が降るといふ珍事を全く疑う気配がありません。一般に「ええじゃないか」には民衆の世直しへの願いが込められているとされますが、街道に沿って伝わっていく熱狂と祝祭的な様相は、新しい時代の幕開けを前にした、一種の狂騒のように映ります。



▼お札降りと乱舞

問い合わせ

歴史文化財課

市史編さん室
(甲南庁舎3階)

TEL 086-80075 FAX 086-8216

みんなの窓

知っているから、しているへ!



「友達がいじめられてたら、どうする？」
「とめるー」
「たすける！」
小学生たちのきらきらした顔が、答えてきます。
「そうだね。でもね、いじめっ子は上級生やったんや」
「それでもたすける」
「何人かでとめる」
「なるほどな。でも、相手は5人もいたんや」
「こっちも、もっと集める」
「先生を呼んでくる」
「いいなあ、よう考えたね。でもね、そこは人通りのない公園で、自分たちの他はだあれもいなかったんや」

「えー？」
「どうしたらええんやろ？」
「・・・」
みんな、困って黙ってしまった。
そのとき、ゆうちゃんが声をあげた。
「そうや! 木を揺する!」
みんな笑った、意味ないやんとか言って。わたしも笑った、最初はね。そして笑いながら、胸が熱くなってきた。
きみは、木を揺するんだね。
何か、するんだね。黙って通り過ぎることをしないんだね。
ありがとう、勇気をくれて。

「差別はいけない」「一人ひとりの人権を大切にしなければならない」私たちの多くはこのことを知っています。人権講演会や職場研修などさまざまな場で学んできました。多くの人々は、この大切なことを「知っている」のです。しかしこれを、「している」へと移行させなければ何も変わりません。どれだけたくさんの知識をため込んでも具体的な行動に移さなければ問題の解決には結びつかないのです。

今年度も、市内各区で草の根人権学習の場である「地区別懇談会(学習会)」が開催されます。わたしたちのまちを、誰もが住みやすい心の通い合うまちにするために、今もっている力でできることについて、ともに考え合ひましょう。

(2008甲賀市人権啓発教材vol.3「知っているからしているへ」より)

問い合わせ 人権推進課 ☎65-0693 FAX 63-4582